K-747

山形市埋蔵文化財調査報告書

熊ノ前遺跡

第3次発掘調査報告書

昭和53年11月

山形市教育委員会

熊ノ前遺跡

第3次発掘調査報告書

序

昭和48年，山形県庁舎新築工事及び主要県道須川橋～滑川線の新設工事中に，熊ノ前遺跡が発見されてから5年経過しました。

その間，昭和49年に第Ⅰ次調査(主体：山形市教育委員会)，昭和50年に第Ⅱ次調査(主体：山形県教育委員会)が行われました。昭和51年7月18日から9月1日までの延べ49日間にわたって山形市教育委員会が主体となり，第Ⅲ次調査を実施いたしました。

第Ⅲ次調査地は山形市所有地（市立第一中学校用地）であり，そこに包蔵されている遺構の保存状況を全面的に把握するため，山形市文化財保護委員会の意見に基づき，二度の予備調査を実施しました。その結果，住居跡7，土壙20，さらに数多くの土器，石器などが発見され，縄文時代の山形に止まらず，村山平野での先人の生活を知る上でも大変意義のあるものと思われます。

遠く4000年の昔の先人の遺構と遺物に触れ，またそれら埋蔵文化財を保存し，後世に伝えていけることは，今日のわれわれの喜びであると同時に使命であると思います。

この数年の間，熊ノ前遺跡の発掘と遺物の整理はもとより，展示会・現地説明会等を開催し，市民の方々に先人の生活文化に触れる機会をつくっていただいた熊ノ前遺跡調査団に敬意を表します。

第Ⅲ次調査団長をお引き受け下さった柏倉亮吉先生（山形大学名誉教授）はじめ，赤塚長一郎先生（県教育委員会指導課)，相田俊雄先生(山形市立千歳小学校)，山口和夫先生(山形市立第四中学校）ほか，調査にご協力くださった方々に深く感謝いたします。

また，県教育委員会文化課の絶大なご援助誠にありがとうございました。

本報告書は小報告ですが，埋蔵文化財に対する理解を深め，同時に教育・文化の発展に寄与できれば幸に存じます。

昭和53年11月

山形市教育委員会

教育長　軽部　晋四郎

例　　言

1　本報告書は，山形市教育委員会が，昭和51年度に実施した，熊ノ前遺跡第Ⅲ次発掘調査の概略である。

2　発掘調査は，昭和51年7月18日から9月1日までの延べ49日にわたって実施された。

3　調査は調査委員会を設置し，その協議の結果にもとづいて実施した。

4　遺構名称は，簡略化するため，アルファベット記号を用い，J（住居跡)・D（土壙）というようにした。

5　調査体制および協力者はつぎの通りである。

調査団長　柏倉亮吉(山形大学名誉教授)

調　査　員　赤塚長一郎（山形県教育委員会指導課)，飯野昭夫（山形市立第三中学校教諭)，相田俊雄（山形市立千歳小学校教諭)，山口和夫（山形市立第四中学校教諭)，尾形ゆり子（山形市立高瀬小学校教諭)

調査補助員　会田容弘（山形大学学生)，鈴木美香（法政大学学生)

協　力　者　吉田三郎（山形大学教育学部教授)，鈴木芳朗（日本大学理工学部講師)

協力団体　長沢礼子(山形大学卒業生)，山形県教育委員会文化課，山形大学歴研考古学部会，山形中央，山形南，山形工業，山形商業，山形東，日大山形，各高校郷土研究部，山形市消防本部

事　務　局　山形市教育委員会社会教育課

（順不同，敬称略）

目　　次

I　遺跡の位置と環境…… 1
II　調査経過…… 2
III　遺跡の層序…… 7
IV　遺構 …… 8
V　出土遺物 ……12
VI　調査の要約 ……22

挿図目次

遺跡付近の全景…… 巻頭図版
第1図　遺跡付近図……巻頭図
第2図　遺跡付近図…… 2
第3図　遺構配置図…… 6
第4図　主要部分セクション図…… 7
第5図　J－2号住居跡L－3号炉平面図 ……10
第6図　D－5・6・11・12号土壙 ……11
第7図　各グリッド出土土器片拓本 ……15
第8図　出土土偶実測図 ……16
第9図　出土石器実測図 I ……18
第10図　出土石器実測図 II ……19
第11図　J－1号住居跡炉 ……23

図版目次

図版 1　(1)発掘調査風景壙
(2)精査・測量風景
図版 2　(1)ステレオカメラによる実測風景
(2)土壙周辺全景
図版 3　(1)J－1号住居跡全景
(2)同上L－1号複式炉
図版 4　(1)L－1号複式炉埋設土器
(2)同上周辺部
図版 5　(1)J－2号住居跡全景
(2)同上
図版 6　(1)L－3号複式炉
(2)同上
図版 7　(1)J－1号住居跡北側土壙群
(2)同上
図版 8　(1)D－1号土壙
(2)同上
図版 9　(1)D－3号土壙
(2)D－4号土壙
図版 10　(1)D－5号土壙
(2)L－4号炉跡
図版 11　(1)D－6号土壙
(2)D－7号土壙
図版 12　(1)D－8号土壙
(2)同上
図版 13　(1)D－12号土壙内土器出土状態
(2)同上
図版 14　(1)土器出土状態
(2)同上
図版 15　(1)土器出土状態
(2)同上
図版 16　(1)土偶出土状態
(2)有孔石製品出土状態
図版 17　(1)L－3号炉上出土の石皿
(2)石棒出土状態
図版 18　E地点出土土器片
図版 19　調査区出土土器 I
図版 20　調査区出土土器 II
図版 21　調査区出土土器 III
図版 22　調査区出土石器類
図版 23　(1)石皿
(2)凹石
図版 24　(1)土偶・石製品
(2)土器細部写真

遺跡付近の全景（航空写真　昭和50年撮影）

第1図 遺跡付近図

（二万分の一地形図山形近傍8号、明治34年大日本帝国陸地測量部）

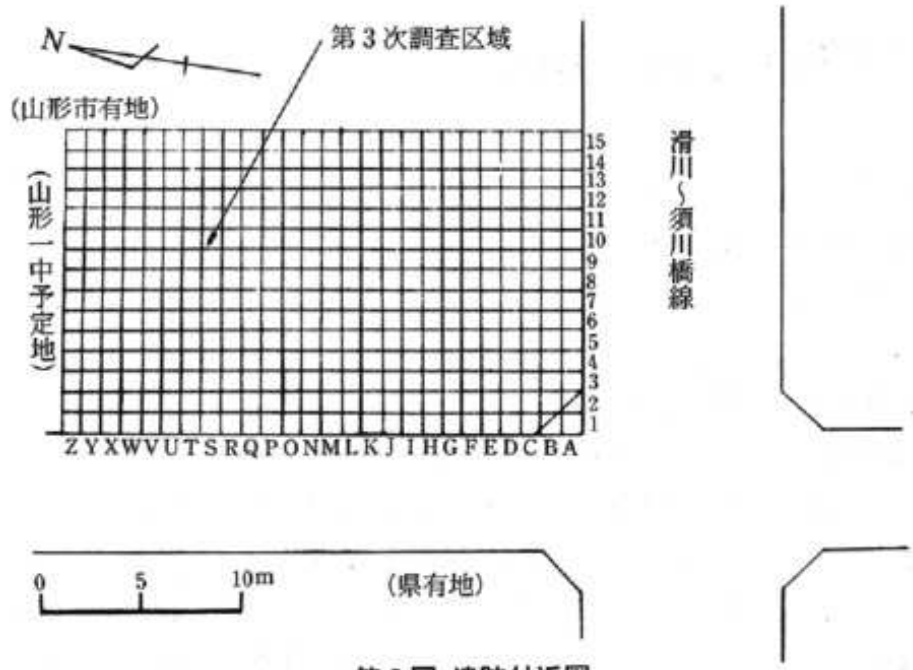
Ⅰ．遺跡の位置と環境

この遺跡に関して，第Ⅰ次調査報告書（昭和50年5月，山形市教育委員会刊）では，すでに，遺跡の名称・範囲・地形上の特徴，周辺に分布する遺跡等の概略について述べてきたため，本項では，より詳しい地形上の特徴と第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ次調査，予備調査地点の位置について説明したい。

熊ノ前遺跡周辺は，昭和48年以降，山形県庁移転（50年移転）を前にして土地区画整理事業（新道開設，都市計画等）が進み原地形をみることができないほど変ってきた。第1図の地形図をみると，遺跡は典型的な扇状地の上部にあることがわかる。

遺跡範囲内に扇頂から西流する三本の小川があり，近世以来自然堰として農業用水に使用されている。第Ⅰ次調査において，土錘等漁撈用具が出土していることなどから自然の小川として西流していたと思われる。さらに，三小川は近世以前には流路は変化しているとしてもその成立が推定できる。グリッド掘りによる予備調査において，小川近くでは地下水または浸水が高く土器は磨滅していること。粒子の細い砂または泥が厚く堆積していることなどをみるに自然流がかなり早くから成立していたことが予想される。

一見，西傾の単調な扇状地であるようにみえるが現須川～滑川線道路は同一南北線上でも最も低く，表面から60cm掘ると地下水が湧きでる所が各地にある。そうした中でも，第Ⅰ次調査地点やE地点（予備調査），第Ⅱ・Ⅲ次調査地点は遺物散布内の南北同一線上では最も高い地形上にあることが判明した。



第2図 遺跡付近図

II. 調査経過

(1) 第III次調査にいたるまでの経過

山形市熊ノ前遺跡が発見されたのは，昭和48年春，第I次調査は49年の夏，同報告書は50年5月に刊行された。その詳細は同報告書に記述されている。

50年春には，山形県警本部前を県文化課が調査主体となり調査し，県文化課と山形市教育委員会の相談の結果，これを第II次調査と呼ぶことにし，その調査報告は，県文化課から発刊されることになっている。

一方，山形県警本部の東，約1万1千坪(約3万6千㎡)は山形市立第一中学校の移転用地であるが，県庁前を通る須川～滑川線道路の南側とともに(49年の調査地点)，熊ノ前遺跡の範囲内である。学校建築と遺跡保存の両重要性から，51年3月～4月にかけ，のべ1週間の予定でE地点の試掘予備調査を実施した。2×22 mのトレンチを設定し調査した結果，大木8a～9式にかけての土器片が整理箱4個分（小破片367点）採集された。個体数や器形は推定できないほど磨滅している。遺構等も全く手懸りをつかむことはできなかった。続いて，残された山形一中建設予定の山形市有地について，全面的にグリッド掘り予備調査を実施した。2×2 mのグリット，12 mごと6～8個×10～8個を設定したが，小川の流域

及び北側においては地下水が高いこと，砂礫が多いこと，かつ遺物は一点も採集できないところがあり，最終的には，第III次調査地点周辺が遺物も多く，地形的な考察からしても，遺構が保存されている可能性が最も大であると判断した。

遺跡の発見以来，満4年にわたり，自動車等重量のあるものの進入や工事等一切行わず，遺跡保護については万全の方策を構じてきた。第III次調査地点周辺については，他の土地には自動車等の進入を認めたうえでも，破壊防止のため，立入禁止をし，第III次査にそなえてきた。なお，第III次調査地点及び周辺については砂で覆い，遺構保存に努めている。

(2) 第III次調査の経過

第III次調査については，山形市教育委員会が主体となり，文化財保護委員会の議を経て主としてI次の調査団（団長・柏倉亮吉）を継続する形で第III次の調査団を組むことになった。第III次調査においてもI次同様，大学関係者はじめ関係機関及び市民各位の協力が大であったことを明記しておきたい。

調査地点の決定については，前記の予備調査に基づいて，柏倉亮吉・赤塚長一郎らが山形市教育委員会並びに文化財保護委員会に報告し，了承を得ていた。

調査期間はトレンチ設定準備，7月17（土）・18日（日）を含め9月1日までのべ49日間に及ぶ。常時現地には，会田容弘，新関信一があたり，相田俊雄，山口和夫らは交替制，赤塚長一郎は連絡・相談・計画，保角里志，横戸昭二，山口孝，阿部明彦等県文化課，山形大学，地元熊ノ前，妙見寺等の方々の協力が特に大であった。

調査期間中の主な動向は次のとおりである。

●昭和51年7月19日（月）曇

トレンチ設定予定地の草刈り，及びトレンチ設定，Aトレンチ東西4×南北36m，Bトレンチ南北4×東西20m，さらに区分けをし，表土はぎ，地層・包含層等の確認のため深掘り用のグリッド（C－2－2G）を設定した。

前日の作業小屋兼休憩用のテントを張るとともに，倉庫及び発掘用具一式を整えベルトコンベヤー三台が入り調査は万全の態勢に入る。

作業員8名，大学・高校生16名に調査員事務局。

●7月21日（水）～24日（土）

連日，猛暑の中の作業，表土取除きは21日でほぼ完了。21日，22日頃には，包含層に達し，足つき石皿や一括土器など多くの遺物が採集された。特にH－1，D－2G付近から土器が集中して出土した。

24日から従来のトレンチ・A・Bのうち A 1～2・B 1～3 G付近が遺構の中心と思われたため，A・Bトレンチの南に拡張し，A～G等のグリッド名を付し，グリッド中心の調査を進めた。粘質の黒色土層のため，地層確認が非常に難しい。しかも炎天続きのため，土に変化を与え，苦労多い作業である。

● 7月25日（日）

I－2，H 1～2 Gで複式炉が発見され，その全貌を明らかにする作業，HIJKLM の1～2 Gで面整理など困難な作業を行う。

E－1 Gで脚付の石皿(破損)が発見された。27日にいたって，F－4 Gを中心として複式炉及び1号住居が確認された。J～QGでも住居跡・石組等発見され，平板測量や石器出土地点のポイントとりを平行して作業を進める。

28日には，QGで土壙を発見，E－6G で埋設土器の発見，1・2号住居の作業が進む。翌日にはI－8 Gでも埋設されている土器が発見される。複式炉，住居面の作業順調に進む。

● 7月30日（金）～8月4日（水）

E－2 Gの複式炉とD－2 Gの土器は同一時代かと思われる。L－5号炉を半截し調べたところ石組みが崩れ，炉内に落ちこんでいることがわかる。H－5 Gで石製装飾品出土。31日にはE－5 Gの炉のセクションとり，D－2 Gでは2個体の土器，合せ口状のものを発見。すり消文様土器。

E－2Gで複式炉と住居の関係をみているうち，J－3号（複式炉をともなう。）が推定される。8月3日まで各住居の面，切り合い関係をさぐっていく。円形か方形プランか。周溝状のものはどうなるか。

4日には，J－2号住居跡に周溝があること。E－5 Gにある複式炉周辺，内部から石器や土器片が多数出土した。

● 8月5日（木）～16日（月）

D・E・F・G－7・8 GのJ－1号住居跡の輪郭が確認された。J－2号住居跡・複式炉は長径約1mの大型。

6日は雨，住居面に満水となる。ポンプにて排水を行う。8～10日，雨のため，実質的な調査不可能。

12日には各住居跡・複式炉等のセクション平面測量等を行う。14日雨，15日小雨のこり，遺構の破損防止のため排水等行う。

● 8月17日（火）～22日（日）

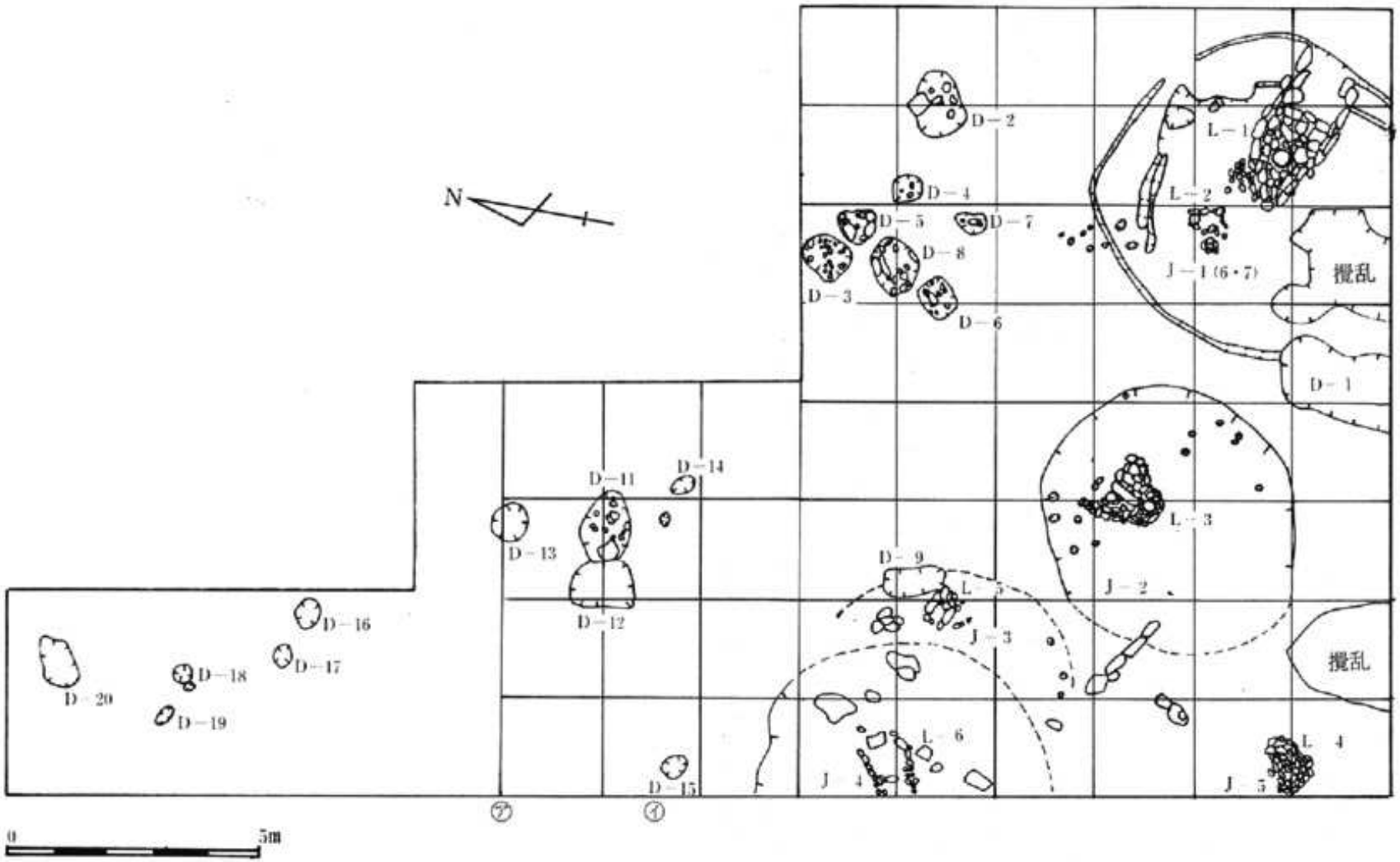
J－2号住居跡に石棒があること。J－1号住居跡に2個の土器が使用されていること。各グリッド・トレンチのセクション，実測等を行う。

● 8月24日（火）～8月29日（日）

D・E・F－1・2Gを掘り下げ（Ⅲ層）たところ，大木（だいぼく）8式の土器片が発見された。24日午後雨。26日雨。

27日，雨あがる。J－1号住居跡，複式炉等の遺構をステレオカメラ撮影することにしたため，その準備作業にとりかかる。一方，E－6G，炉の開口部を掘り下げたところ，砂をしきつめていることがわかった。29日は写真撮影の仕事を行う。

30，31日にはステレオカメラ撮影を行い，9月5・6日に遺構に約30cmの砂を入れ保存措置を講じ，発掘調査を完了した。


N
D－2
D－4
D－5
D－7
D－8
D－3
D－6
L－1
L－2
J－1(6・7)
攪乱
D－1
D－11
D－14
D－13
D－12
L－3
D－9
J－2
J－3
攪乱
D－16
D－17
D－18
D－20
D－19
L－6
J－4
D－15
L－4
J－5
⑦
①
0
5m

第3図 遺構配置図

III　遺跡の層序　(第4図)

当遺跡は，馬見ケ崎川とその支流によって形成された扇状地上に立地するため，複雑な土壌の堆積をみせている。地点によって堆積物も異なり，河川の流動作用が活発であった事をものがたっている。以下に簡略的ではあるが主要部分の堆積状況を示してみた。

第Ⅰ層　表土（耕作土）

色調は一般に茶褐色または暗茶褐色を呈する。かなり粘質をおび，第Ⅱ層に含まれているような礫はあまりみあたらない。表土層とはいえ，かなり多量の小土器片を含んでおり，大部耕作等によって攪乱された可能性が強い。厚さは平均して30～40㎝である。

第Ⅱ層　黒褐色土（包含層）

比較的しまりをもった土層で，大小の礫を多量に含んでいる。砂質をおびており，厚さは5～12㎝である。

第Ⅲ層　黒褐色砂質土（包含層）

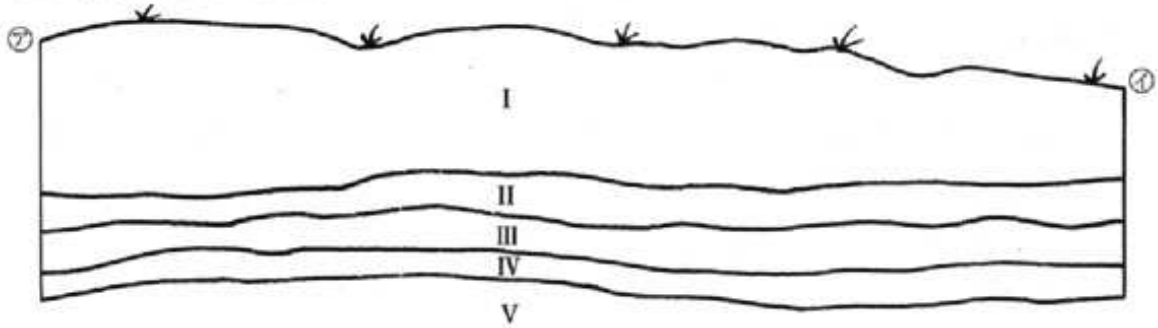
微砂質で白～黄色の粒子を含む。遺構はこの層から掘りこまれている。厚さは7～12㎝である。

第Ⅳ層　暗褐色砂質土

厚さ10㎝程で，かなりやわらかい。基盤第Ⅰ層にあたる。

第Ⅴ層　黒色粘質土

二枚目の基盤層とでもいうべき土層で，真の黒色を呈し，粘質をかなりおびている。泥土の状態に近く，腐植物がかなり混入している。



第4図 主要部分セクション図

Ⅳ　遺構

今回の発掘調査によって発見された遺構は，遺構配置図(第３図)にも示したような状況をみせている。住居跡は炉跡の数からのみ考えれば，７棟の存在が考えられる。

そのうち６棟はいわゆる複式炉をもった大木９・10式の時期にあたるものである。もう１棟は大木８ｂ式，特にＪ－１号住居跡は，構造的に上部が損失しているため，壁の有無は不明であるが，壁下をめぐる周溝，主柱穴，支柱穴等が認められている。他の住居跡では，プランの一部がようやく確認されたのみにとどまる。住居跡以外には，大木８ｂ式を中心とする時期の土壙群が確認されている。

Ｊ－１号住居跡（第３図・図版３・４）

直径約６ｍのかどばった円形プランの住居跡で，全体の４分の３程が確認された。壁は不明であるが，壁下をめぐる周溝があり，それにともなって土壙の存在も認められている。周溝・複式炉の状態から考察すると，少なくとも２～３棟の住居跡が重複しており，その状態から考察して拡張された住居跡の可能性が強い。複式炉は長軸３ｍと超大で作りも丁寧である。

Ｊ－２号住居跡（第３・５図・図版５・６）

直径５ｍ前後の楕円形あるいは隅丸方形の住居跡で４分の３ほど住居跡の輪郭を確認することはできたが，周溝とみられる遺構ははっきりとは確認できず，また柱穴とみられるピットも位置が不定で正確に把握できなかった。

複式炉は埋設土器を１個有するもので，その埋設土器はかなり破損しており，また土器に対する石組みも正円ではなく楕円形に近いことから，はじめからこわれた土器を意識的に使用した可能性が強い。土器は部分的に破片が二重にかさなっているところもあり，鉢の形態を示してはいるものの，この埋設土器が一個体として考えてよいものかは疑問である。土器内部の堆積状態は２層に分けられる自然堆積を示している。１層は暗茶褐色土，２層は焼土でその中には数片の土器が含まれており，埋設土器の一部であるのか，意識的に入れられたものかは判然としない。破損した土器を使用していることから埋設土器として囲っていた土器が使用中に内部に崩落したものか，下から浮きあがったりしたのではないかと思われる。内部の埋土からは，めだった炭化物はほとんど発見されなかった。前庭

部には，底部に大形の石を用いているが，埋設土器へ向かう立ちあがりには握り拳大の河原石を使用し，両辺への立ちあがりには平たい大形の石を使うと供に，握り拳大の石も使用している。複式炉内部の覆土はほぼ正則な自然堆積の様相を示しているが，内部には石棒とも考えられるような70㎝程度の石柱が埋設土器部に向かってたて掛けるようにおいてあった。これは自然にはいりこんだものではなく人為的に置かれたものと推測される。前庭部には石組が用いられておらず，若干掘りくぼめられている。石のぬき取り痕のようなものは確認できなかった。

全体的にみると石組部が放物線のような輪郭を示している。前庭部も含めた場合直径1・9m，石組部幅は1.3 mである。炉の型態や住居跡の輪郭・床面の状態・セクション等からみて，単独住居跡と考えられる。

土　壙

土壙は発掘区の上部北側に特に集中して存在する。第Ⅳ層の面でプラン確認がなされた。大小さまざまではあるが，主としてプランは楕円形を呈し，覆土また土壙底面に，多量の礫（河原石）と土器を含んでいる。むしろそのような状態から集石土壙とでも呼称すべき必要があるが，一応性格的な見地から土壙と称した。配図にも示したようにピットらしきものも含め，数は20基ほどになる。埋土は大部分が茶褐色土で炭化物を含んでいるものもあるなど色々である。

D－5号土壙（第6図－3・図版10－(1)）

F－6Gに位置する。確認面は第Ⅳ層でプランはややいびつな円形を呈している。かなり多量の礫を含んでおり，その中に土器片が散在している状況である。上端径78㎝深さ6㎝を測り，礫は大きいもので28㎝である。覆土に含まれていた土器片の文様からして大木8b式に該当する時期と考えられる。

D－6号土壙（第6図－4・図版11－(1)）

E－5・6グリッドにまたがって存在する。いびつな円形を呈する。中央よりややずれた位置に長径28㎝ほどの礫がみられる。その脇には土器片が比較的まとまった状態で認められる。長径82㎝で深さは4～6㎝である。やはり大木8b式に相当する土壙と思われる。

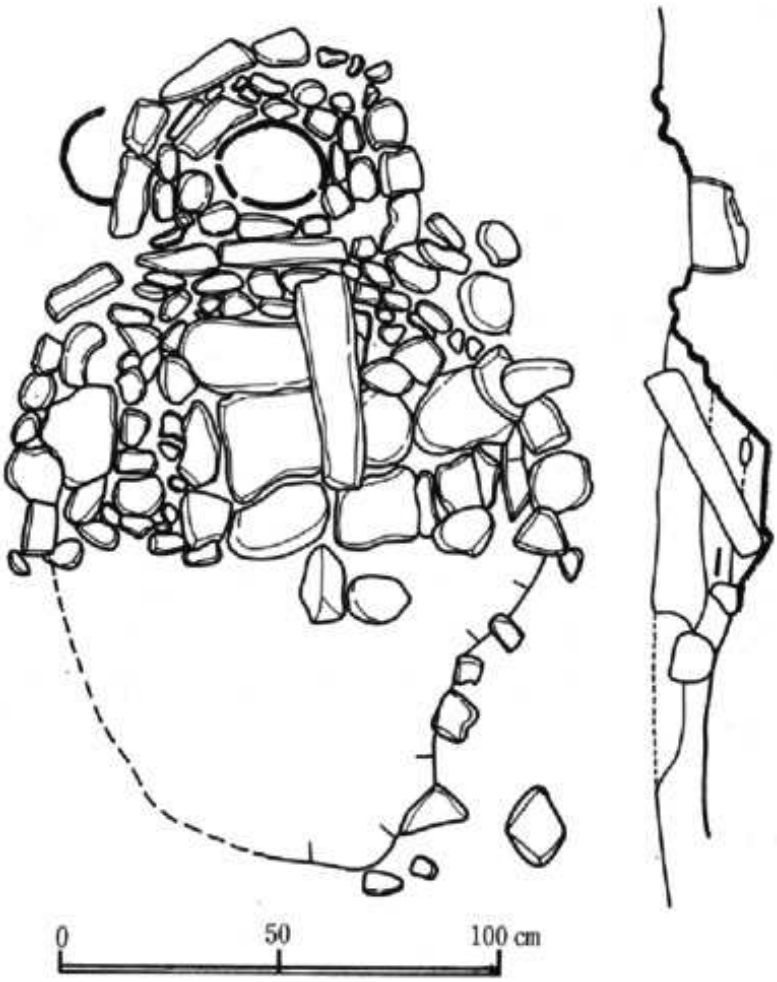
D－11号土壙（第6図－2）

H・I－3・4グリッド内に存在する。D－12号土壙によって切られている。中央部には礫

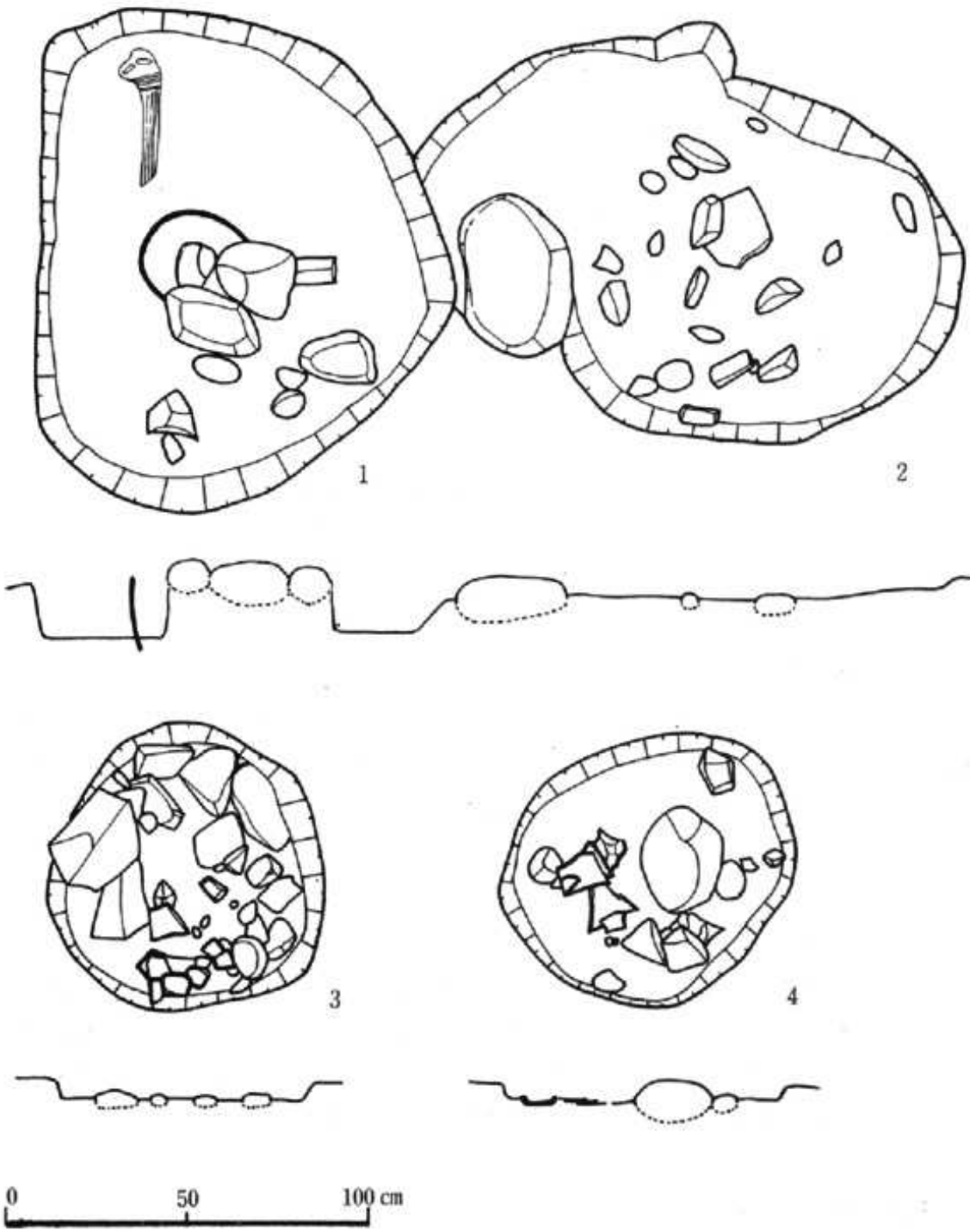
がころがりこんだような状態で散在している。プランは横に長い円形をしており，かなりいびつな部分がみられる。長軸で約150㎝で深さは4～5㎝である。時期はやはり大木8b式の時期と推測される。

D—12号土壙（第6図—1・図版7）

H•I—2•3グリッドに存在する。五角形に近いような円形を呈し，D—11号土壙を切ってつくられている。ほぼ中央部に甕形土器が直立状態で検出された。120×114㎝程の大きさである。出土した土器から大木8b式の頃のものと考えられる。



第5図　J—2号住居跡L—3号炉平面図



第6図 D－5・6・11・12号土壙

V　出土遺物

今回の調査によって出土した遺物は，整理箱にして60箱ほどである。縄文式土器をはじめ，石器・土製品・自然遺物（炭化物・骨片）などがあり，その殆んどが第2～3層・もしくは遺構内より出土したもので，内訳はつぎに示したとおりである。

〔土製品〕……土器　大木8a・8b（整理箱10）
　　大木9・10　（　〃　45）
　　土偶片・円板状土製品・球形土製品

〔石製品〕……石器　石鏃・石錐・石匙・石槍・石篦・掻器・磨製石斧・石皿・凹石
　　磨石・ペンダント状石製品・石棒・軽石製品等

縄文式土器

殆んどが破片で，整理箱にして55箱ほど出土している。そのうち復元可能なものは十数個におよぶが，保存状態が非常に悪い。この中には遺物を取りあげる際に崩壊してしまったものが含まれている。ここではある程度復元出来たもののみについて説明したい。

N－5G出土（図版19－1）

口縁部の径約31cm・現存の高さ約21cm・厚さ6mmの深鉢形土器の部分である。口唇部を大きく隆起させ，四カ所に渦巻形の把手をつけ，把手と把手の間に一条の太い沈線文を施している。さらに体部全体に縄文を施し，口縁部で横方向に二条の粘土紐を，縦方向に幅広く二条の粘土紐を，さらに貼付文の間に楕円形の貼付文を配している。

D－12号土壙出土（図版19－2）

上部が欠如している。現存の高さ約30cm，胴部の径26.8cm・底部の径14.9cmの深鉢形土器である。厚さ8mm，胎土はややもろく焼成もあまりよくない。器面全体に縄文が付さ

れ，その上に，胴部中央に三条の渦巻沈線文，さらに縦方向に三条の平行沈線文・平行沈線文の間に一条の縦方向の波線文が沈線で施されている。また，底部には網代文が残っている。

D－3号土壙出土（図版19－3）

上部が意図的に切断されており，下半分しか残っていない。現存部分の高さ約11cm，径18.5cmほど，底部の径は12.6cmで鉢形をしている。厚さ7mmで胎土はかなりもろく焼成もあまりよくない。全体に底部まで縄文が施されている。

D－1号土壙出土（図版20－4）

口径が31.5cm・高さが16.5cm・底部の径が7.7cm，口縁部の径が35cmの大きく内湾している浅鉢形土器で，厚さ約1cm，胎土・焼成ともに良い精製土器である。口縁部から胴部にかけて「U」の逆字型にすり消し縄文が施され，さらに外側に2条の隆起帯があり，その間にもすり消しが行なわれている。体部の下方には一面縄文が施され，底部はやや突き出ている。

J－2号住居跡出土（図版20—5）

上半分だけであるが，口径27.2cm・現存の高さ約20cm・胴部の径が34.2cmの大形甕形土器の部分である。厚さおよそ9mm，胎土が良く焼成も硬い。口唇部から器面全体に縄文が施されている。この土器は複式炉に埋設されていたもので意図的に下半分を切断したものと考えられる。

J－1号住居跡出土（図版20—6）

口縁部が欠如している。現存の高さ約30cm・胴部の径29.0cm・底部の径9.9cmの深鉢形土器である。厚さ6mmで胎土はややもろいが焼成は良い。器面全体に縄文が施されており，底部は網代底になっている。

D－3号土壙出土（図版21－7）

口縁部が欠けているが，現存の高さ約22.0cm・胴部の径21cm・底部の径7.8cmの深鉢形土器で，厚さ6mmほどの精製土器である。口縁部から胴部にかけて大きく「U」の字型にすり消し縄文が施されており，さらにその外側にも隆起帯が施されすり消しが行なわれている。胴部以下には全面に縄文が施されている。

D－2 G出土(図版 21—8)

上部が欠如している。現存部分の高さ約 29 cm・胴部の最大径 29.3 cm・底部の径 8.4 cm の甕形土器で，胴部が大きく張り出している。厚さは 5 mmで胎土はあまり良くない。上半分には大きくすり消し縄文を施し，下半分には器面全体に縄文を施している。体部のやや下方に四カ所，対をなして 7 個の小さい穴がある。これは一度こわれてしまったものに紐を通し補修した穴と考えられる。

I－1 G出土(図版 21—9)

台付鉢の台の部分である。現存の高さ約 10 cm・底部の径 12.1 cm・台の部分は全部充塡されていない。胎土はもろく焼成も良くない。台部の中央部に縦約 3.5 cm，横約 2.5 cmの楕円形の三個の穴が穿たれており，穴と穴との間に楕円形にすり消し縄文が施されている。

I－1 G出土(図版 21—10)

口縁部が欠如している深鉢形土器の部分で，現存の高さ約 29 cm・底部の径 10.8 cm・厚さ 7 mmである。胎土はやや良く焼成も良い。器面全体に縄文が施されている。

土偶(第 8 図・図版 24)

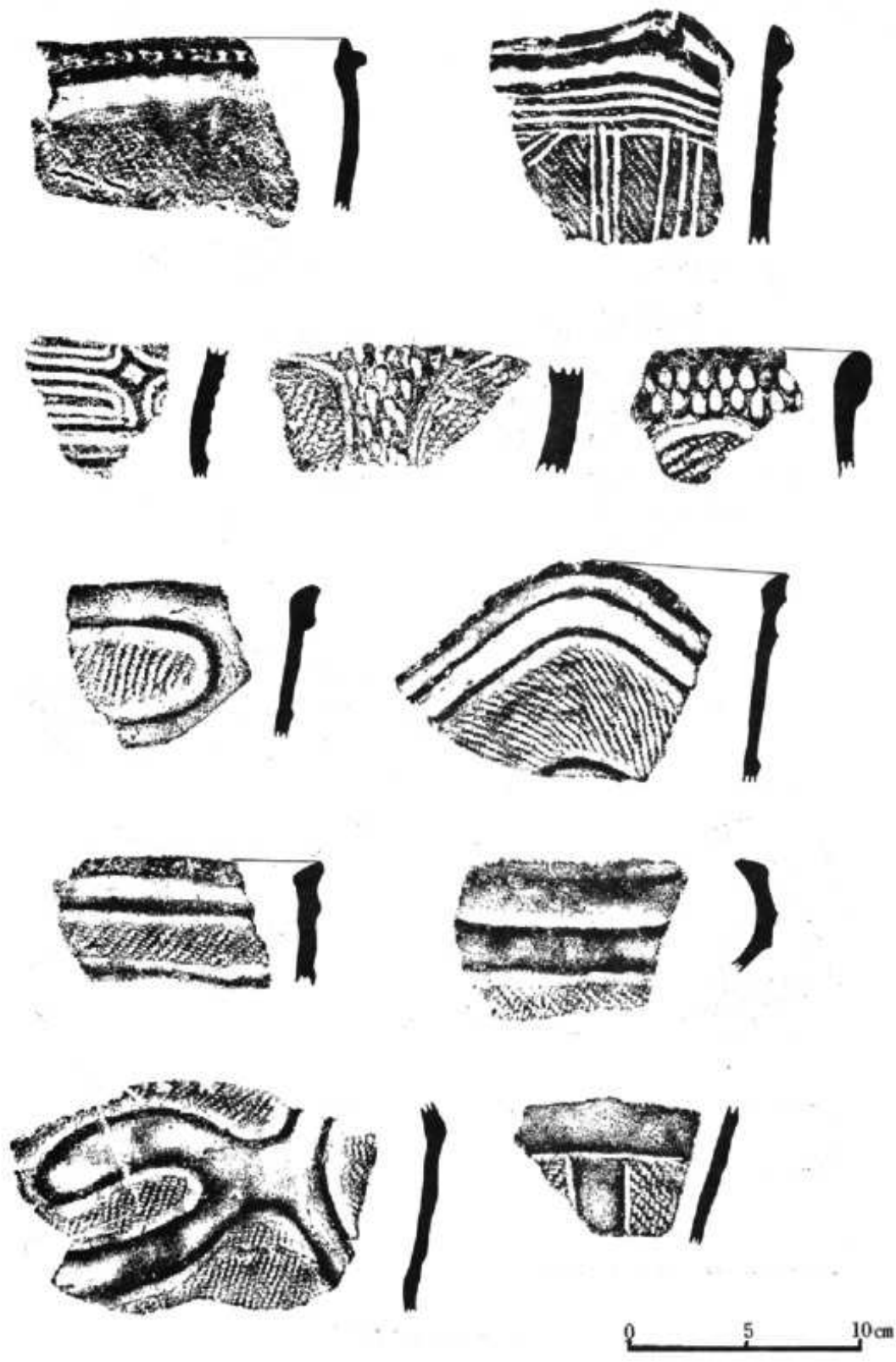
Aトレンチ表土出土（第 8 図－1）

土偶の胴部で頭部・左腕・脚部を欠いている。断面は，凸レンズ状をなしていたものと推測される。胎土・焼成が粗悪なためか，保存状態はあまり良くない。文様そのものはひっかいたような沈線文で，色調は明茶褐色を呈する。形態的にみてかなり抽象化したもので，作り・文様等から時期的には大木 8 b式に該当するものと思われる。大きさは縦 10 cm，横 10.6 cmである。

D－7号土壙出土(第8図－ 2・図 版24－1）

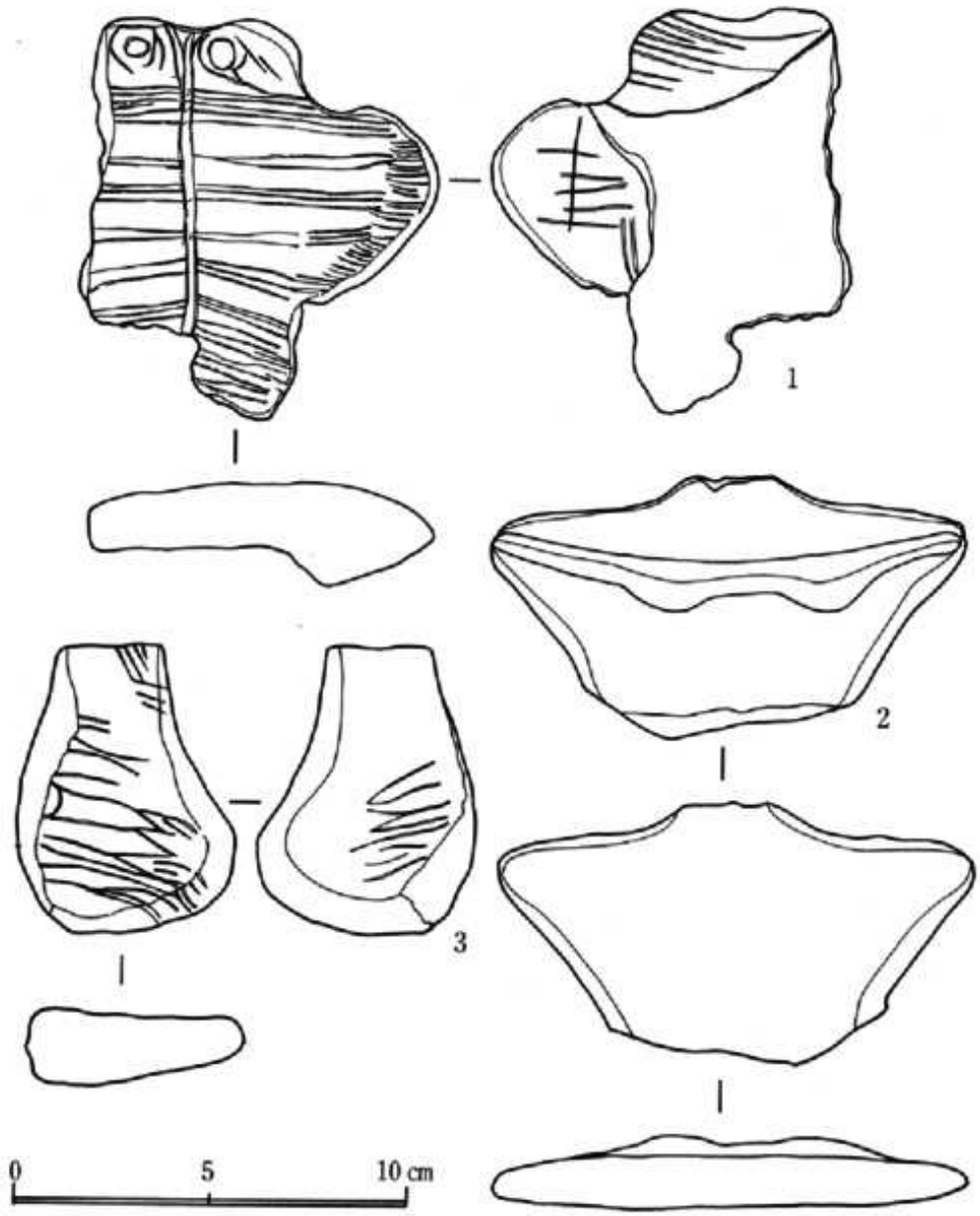
頭部および下半部を欠損している。保存状態は良好ではなく，表面がかなり風化をみせている。色調は明茶褐色で，かなりの粗砂を含んでいる。全体的には板状をなすが，胸部は簡略化した両腕の先端から，粘土紐状のものを貼りつけ誇張してつくられている。最長横幅 12 cm，主軸長 6.2 cm，厚さは 1.6 cmである。

Bトレンチ表土出土（第 8 図—3，図版24—3)



第7図　各グリッド出土土器片拓本

肩の部分と思われる破片である。形態的にはやや異なるが，第８図－１の土偶と施文方法等が非常ににかよっており，ほぼ同一時期に製作されたものと推測される。文様はひっかいたような沈線文である。大きさは，長さ 7.2 cm，幅は 5.6 cmになる。



第８図 出土土偶実測図

石器

今回の調査によって出土した石器は，整理箱にして5箱におよぶ。打製石器が殆んどで剝片がかなり多い。材質的にみると頁岩が大部分で，チャート・石英・玉髄等がある。凹石・磨石・石皿等の石器は，安山岩・砂岩で作られている。

磨製石斧（第9図・図版22・24）

1.H－9G出土（第9図－1・図版22）

表土中より出土したもので，玄武岩を素材としている。丁寧に磨きあげられており全体に擦痕を残し，刃部は欠損している。かなりの重量をもち，長さ14.5cm，長さ3cm程である。

2.H－6G出土（第9図－2・図版22）

砂岩製で，片面がかなり風化しており，原石時の状況をよくあらわしている。頭部を欠損し，刃部は比較的ゆるやかなカーブを描いている。長さ10.4cm，厚さ2cm程である。

3.H－2G出土（第9図－3・図版24）

小形の磨製石斧で良質の石材を使用してつくられている。磨きはかなり丁寧で，表面は光沢をおびている。形態的にはかくばったつくりをしており，ごくわずかではあるが，刃部先端は細かく欠損している。長さ4.8cm，厚さ8mmである。

磨石

4.T－2G出土（第9図－4・図版24－6）

円板状を呈し，全体を磨いて作られたもので，側の部分は縦方向に，表裏面には横方向に擦痕が認められる。直径3.4cm・最厚部で1cm程で，用途は不明である。

有孔石製品

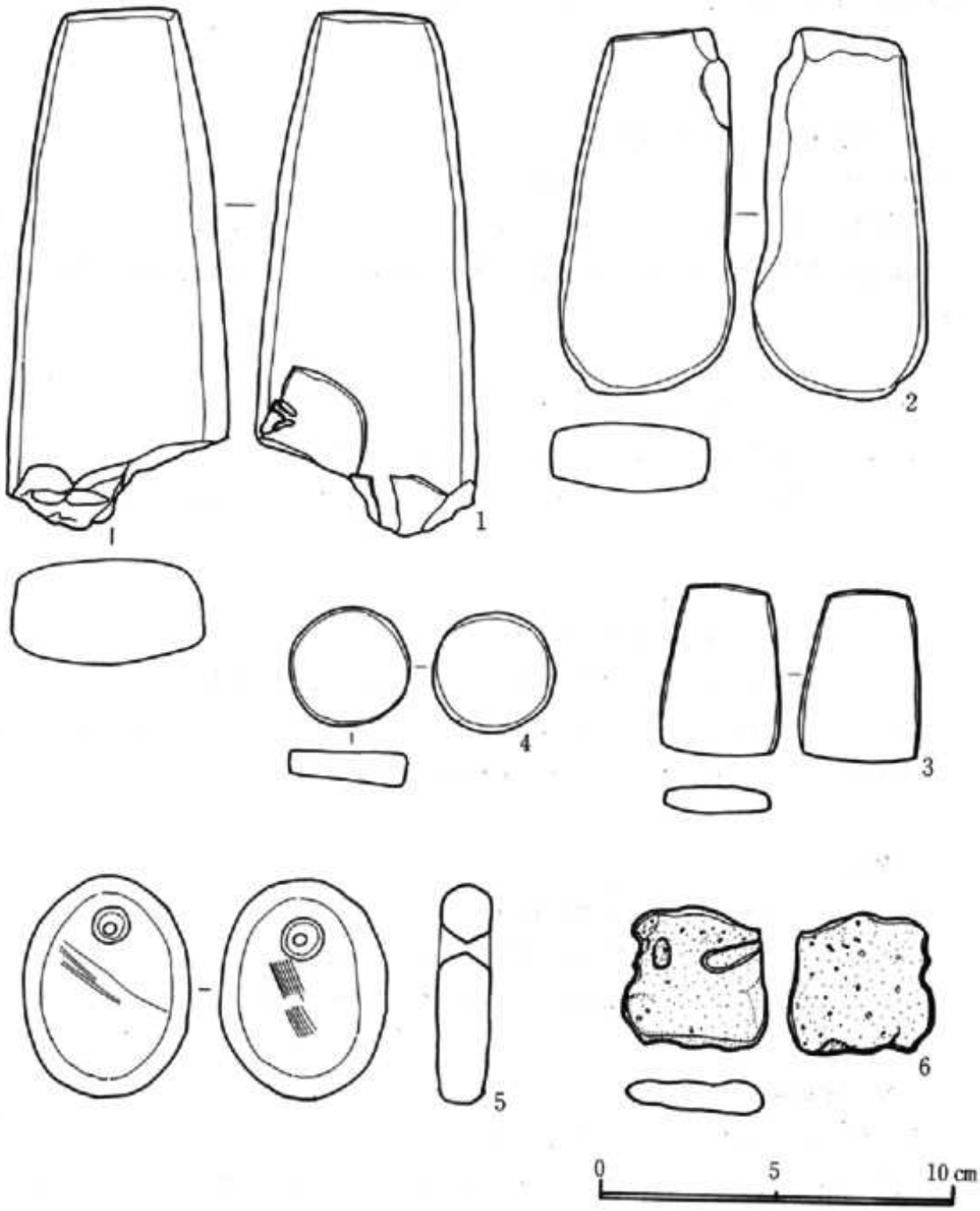
5.H－2G出土（第9図－5・図版24－5）

楕円形の礫の両面を研磨し，その上端部に穿孔したもので，一種の装飾品（ペンダント）のような用途をもっていたものと推測される。長さ6.2cm・厚さ1.6cmである。

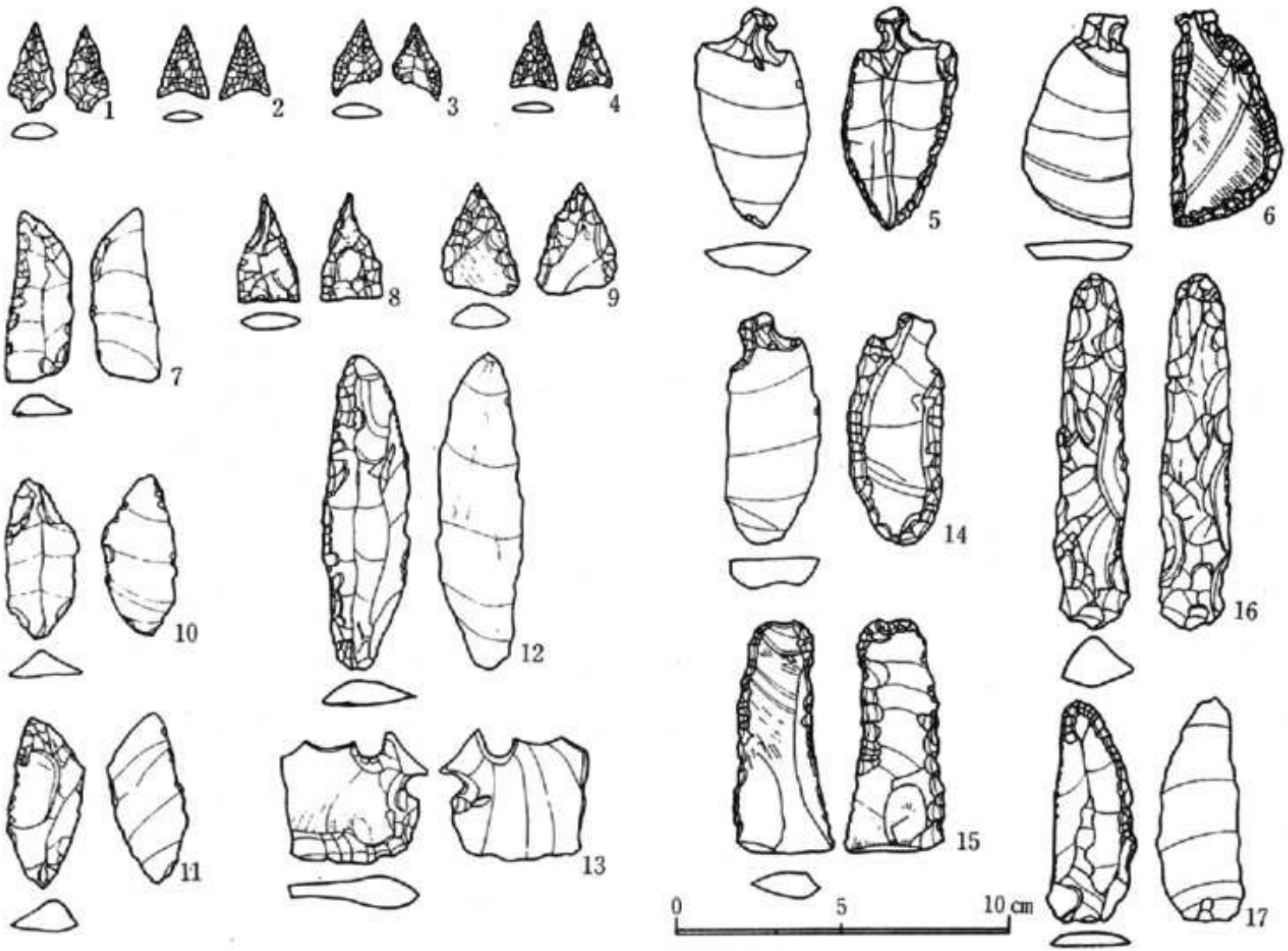
軽石製品

6.J－1号住居跡（第9図－6）

軽石で作られたもので，断片的なもので色調は黒色を呈しているが，用途は不明である。大きさは，4cm×3.8cm・厚さは8mmで凹凸が著じるしい。



第9図 出土石器実測図



第 10 図 出土石器実測図

石鏃（第10図・図版22）

石鏃は全部で20点出土している。形態的には幾つかのパターンにわけられるが，基本的には二等辺三角形を呈し抉りを有するものが大部分である。あまり長大なものは見られず，平均的には2cm前後が多い。一般に厚さは薄く，剥片を加工し中にはバルブを残すものもみうけられる。剥離・調整は一定せず，丁寧に仕上げられているもの・側縁部のみ加工し，剥片の原形をとどめているもの等と様々である。出土した石鏃をもとに外形から，次のように分類してみた。

I　菱形（茎と身の部分が明確でないもの）
II　三角（抉りを有しないもの）
III　〃　（浅い抉りを有するもの）
IV　〃　（深い抉りを有するもの）
V　〃　（茎を有するもの）
VI　棒状（棒状をなし石錐に近似しているもの）

これらの石鏃の中で最も多い形態は，無茎三角鏃で抉りの深いものが圧倒的に多い。材質からみると，頁岩・チャート・玉髄・石英・黒曜石の順でしめられている。

石匙（第10図—5・6・13・14）

各グリッド・住居跡等から出土している。頁岩製で一次剥離面のバルブにつまみをもち，形態的には横形のものが一般的である。片面加工で，中心軸に対して刃部が直交するものである。形はややふくらみをもってはいるが，半月形に近いもの・先端の尖った三角形をなすもの等がある。

スクレイパー（第10図—7・10～12，15～17）

機能的にはナイフのような用途に使用されたと思われるもので，形は一定していない。篦状を呈するもの・ナイフ形を呈するもの等がある。周縁部をきれいに加工し，刃部を調整しているもの，剥片の側縁部・例えば片側のみ加工しているもの等がある。何れも頁岩を素材料としてつくられている。

石皿（図版23—(1)）

断片も含め，4点出土している。うち2点が脚付石皿で，全体の形は四角い形になる。大きさは，30cm位になるものと思われる。材質は砂岩製が多い。

石棒（図版17—(2)）

3点出土しており，1点は調査途上に紛失してしまった。形態は棒状を呈し，全体の半分ほどで完全な形を残していない。炉跡内から出土しているものがあり注目される。

凹石（図版 23—(2)）

凹石は全部で 30 点ほど出土しており、砂岩・安山岩の円礫を使用している。大きさは大体 10 cm×10 cmのものを中心とし，名称のとおり，くぼみを両面に有するもの，片面に有するもの・またその凹の断面形態も，ろうと状を呈するもの・椀状を呈するものがある。またなかには，磨石等にもくぼみをもつものもみうけられる。

すり石

すり石は破片も含め，15 点出土している。比較的重量のある河原石（円礫）を使用し，5～6 cmの球状にみがきあげられている。おえらく石皿とセット的な状態で，併用されたものと推測される。

Ⅵ　調査の要約

山形市熊ノ前遺跡は，山深い蔵王連峰に源をもつ，馬見ケ崎川によって形成された扇状地上に位置している。明治34年に製作された地形図（第1図）をみると，遺跡ののっている地形は，小河川にはさまれた舌状の微高地を呈していた事がわかる。周辺には縄文時代をはじめ，平安時代にいたる遺跡が点在している。遺跡の範囲は分布調査の結果から，3万数千㎡におよぶ事がわかっている。戦後になって周辺部の農地の整備事業が進み，現在では原地形とは全くちがった環境をみせている。

正式な調査は，これまでに3度実施されている。Ⅰ次は山形市教育委員会が，Ⅱ次は県教育庁文化課が，Ⅲ次は山形市教育委員会が主体となり，発掘調査をおこなっている。今回の調査の対象となったのは，約300㎡である。実施時期が盛夏であったために土が乾燥し，遺構の検出には困難をきたし，期待したほどの良い結果を得られなかった。

今回の調査によって検出された遺構は，縄文時代中期中葉～後葉にわたるものである。詳細にいうと，石囲炉を有する大木8b式期の住居跡1・大木9～10式期の住居跡6・土壙20・性格不明遺構1となる。住居跡はプランを明確に把握できたものが少なく，構造的な面からみると不明な点が数多くある。

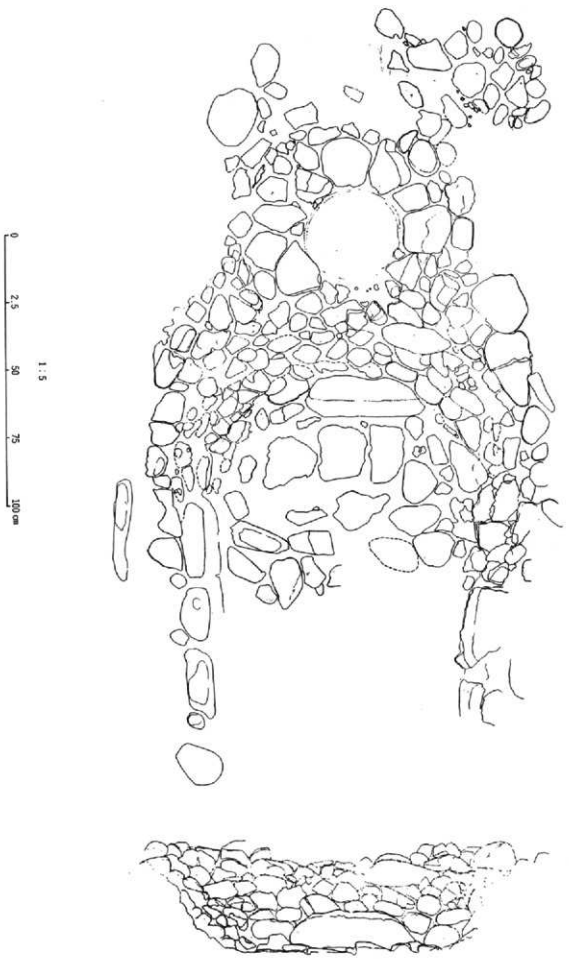
J－1号住居跡は，円形を呈するが，周溝・柱穴が確認され，長軸3mという複式炉を有している。炉内には若干の炭化物らしきものが，含まれていた。本住居跡は一棟のみでなく重複しており，複雑な様相をみせている。

J－2号住居跡は，プランの一部が確認され，かなり重なりあった状態で複式炉が検出された。

土壙は大小さまざまなものが20基認められ，時期的には大木8a・8b・9・10式とまちまちである。住居跡にともなうもの，土壙のみ集中するものがあり，性格的には不明である。遺物もまた前述したように多量におよび，その内容も豊富である。

当時の集落構成や，遺物の機能等を考えるうえで，これらの遺構・遺物は，重要な課題を含んでいる。

撮　影　昭和51年8月使用カメラＳＦ40　　座標系第Ⅵ系
測　図　昭和53年3月図化機オートグラフＡ10　等高線間隔　50㎝



第11図　Ｊ－１号住居跡炉

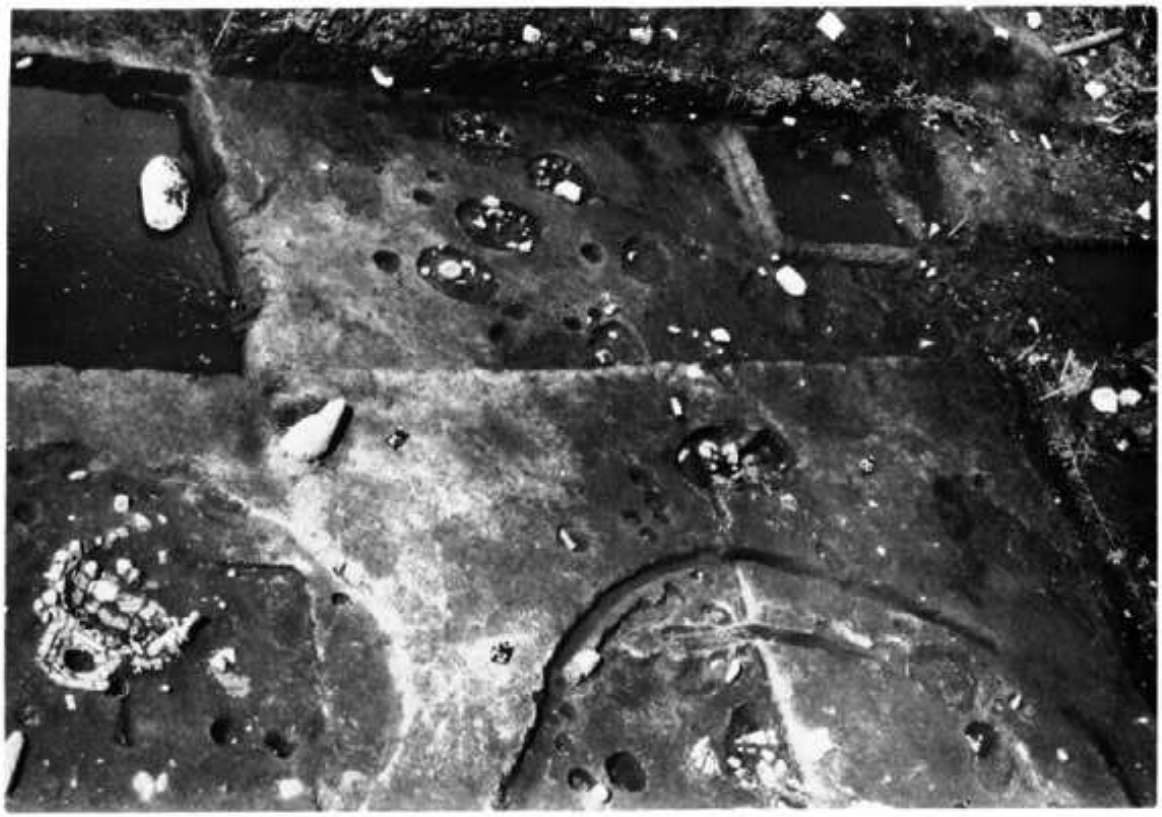
図　　版

図版 1

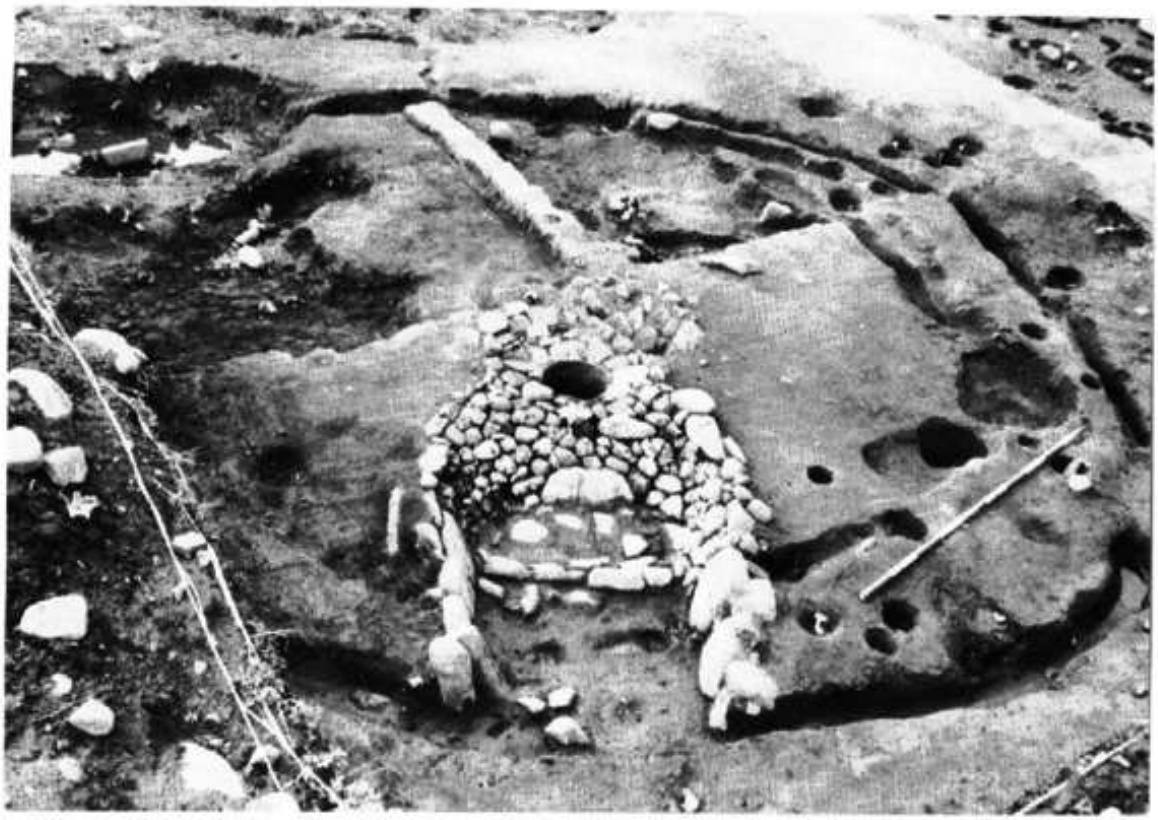
(1)発掘調査風景

(2)精査・測量風景

(1)ステレオカメラによる実測風景



(2)土壙周辺全景



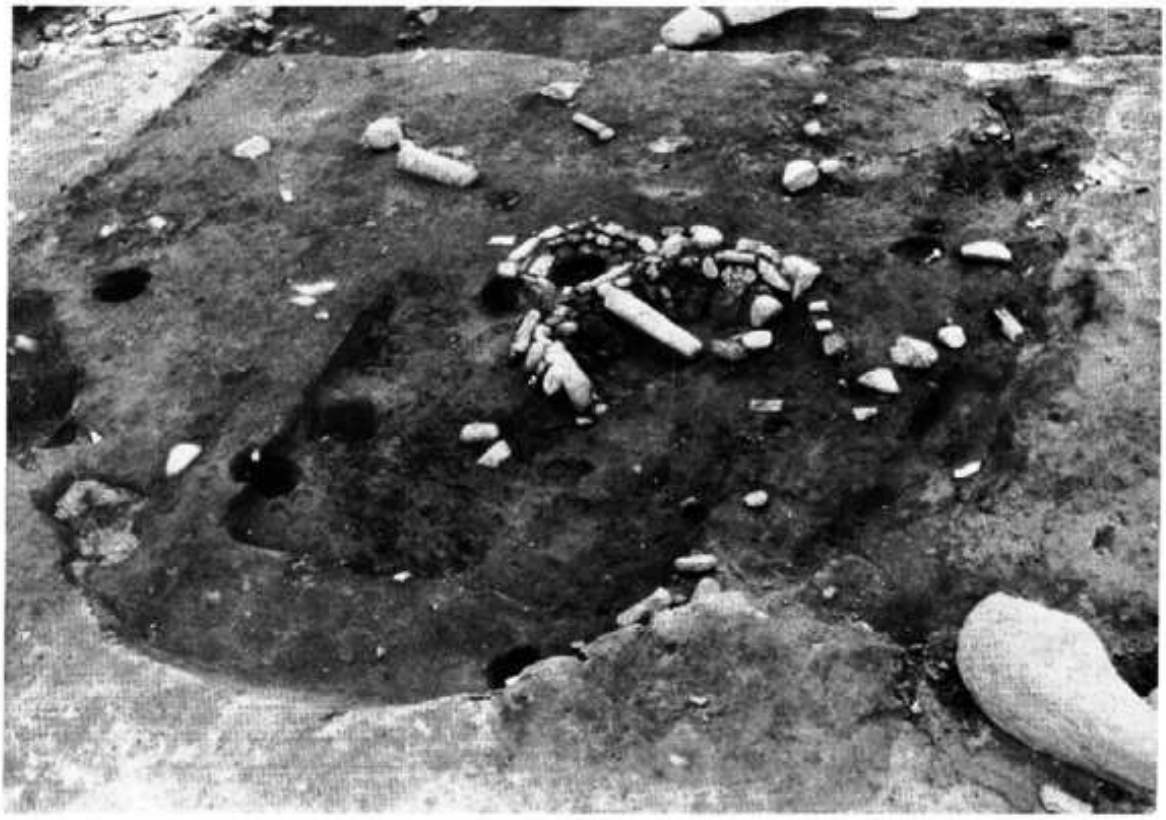
(1)J－１号住居跡全景

(2)同上Ｌ－１号複式炉

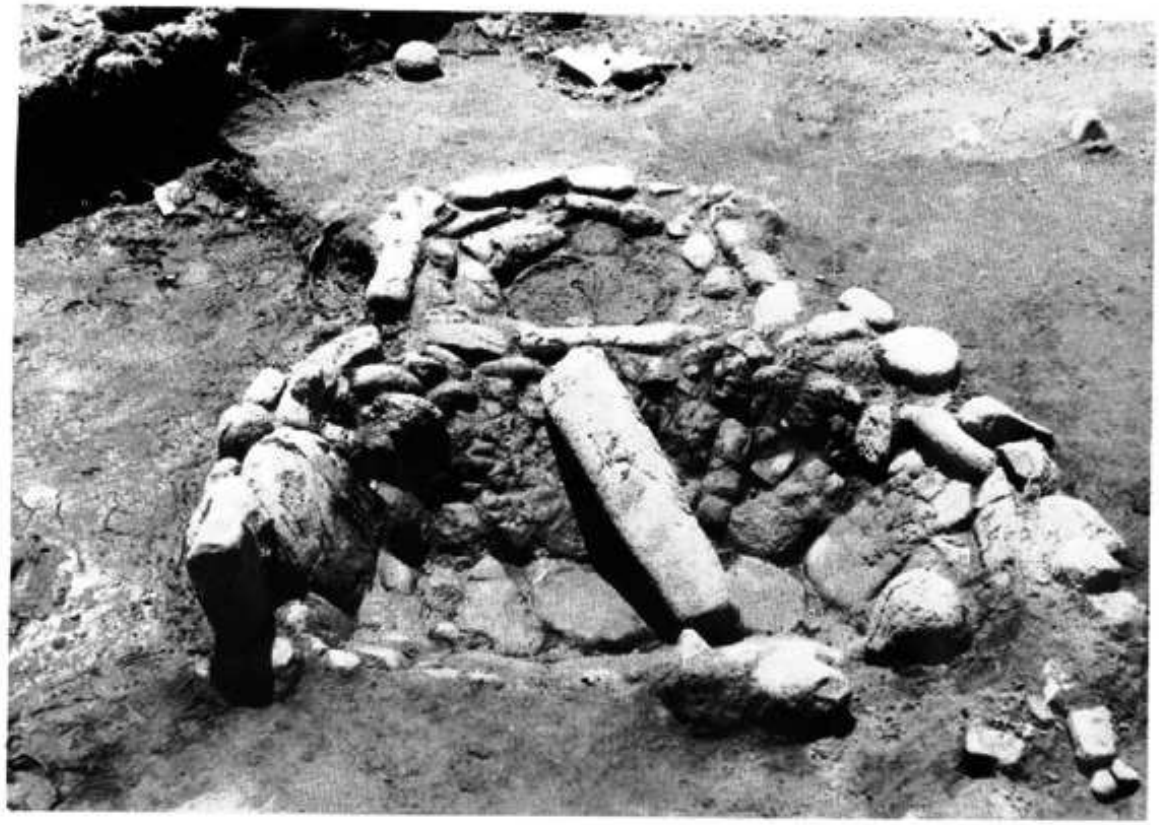
(1)L－1号複式炉埋設土器

(2)同上周辺部

(1)J－2 号住居跡全景



(2)同　　上



(1)L－3号複式炉(J－2号住居跡内)

(2)同　　上

(1)J—1号住居跡北側土壙群

(2)同　　上

(1)D－1号土壙

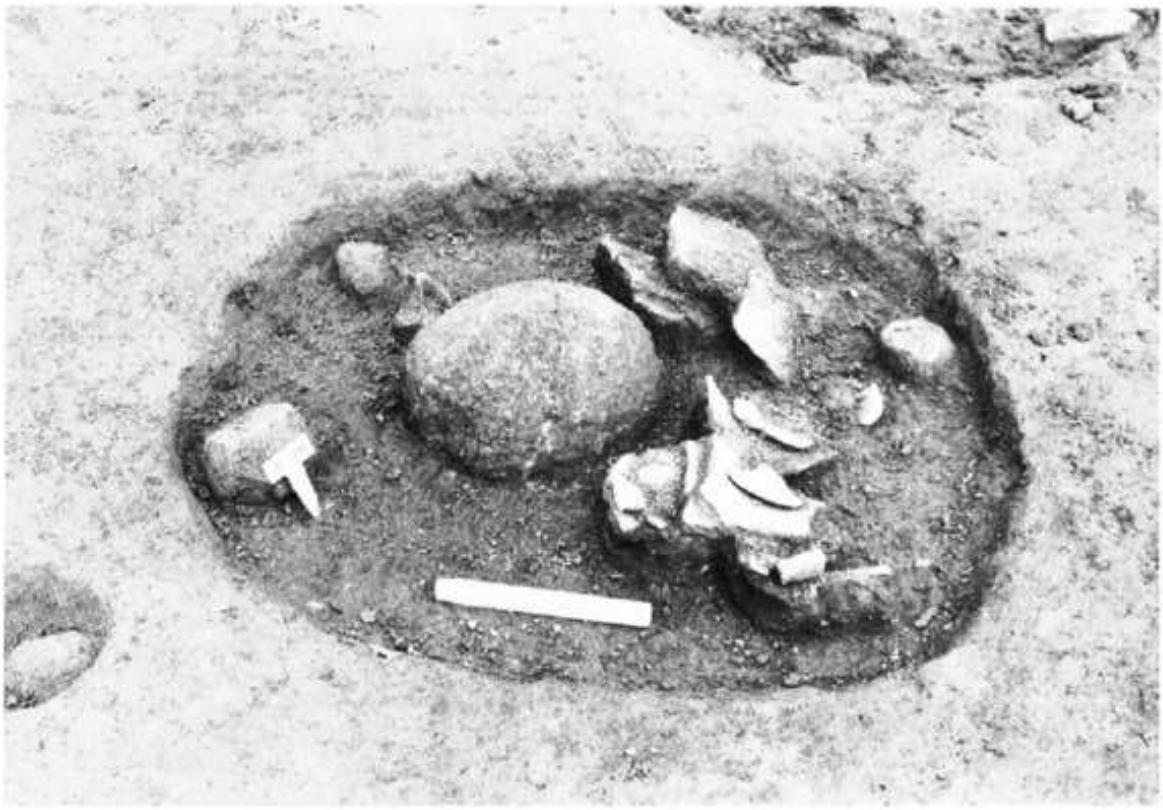
(2)同　　上

(1)D－3号土壙

(2)D－4号土壙

(1)D－5号土壙

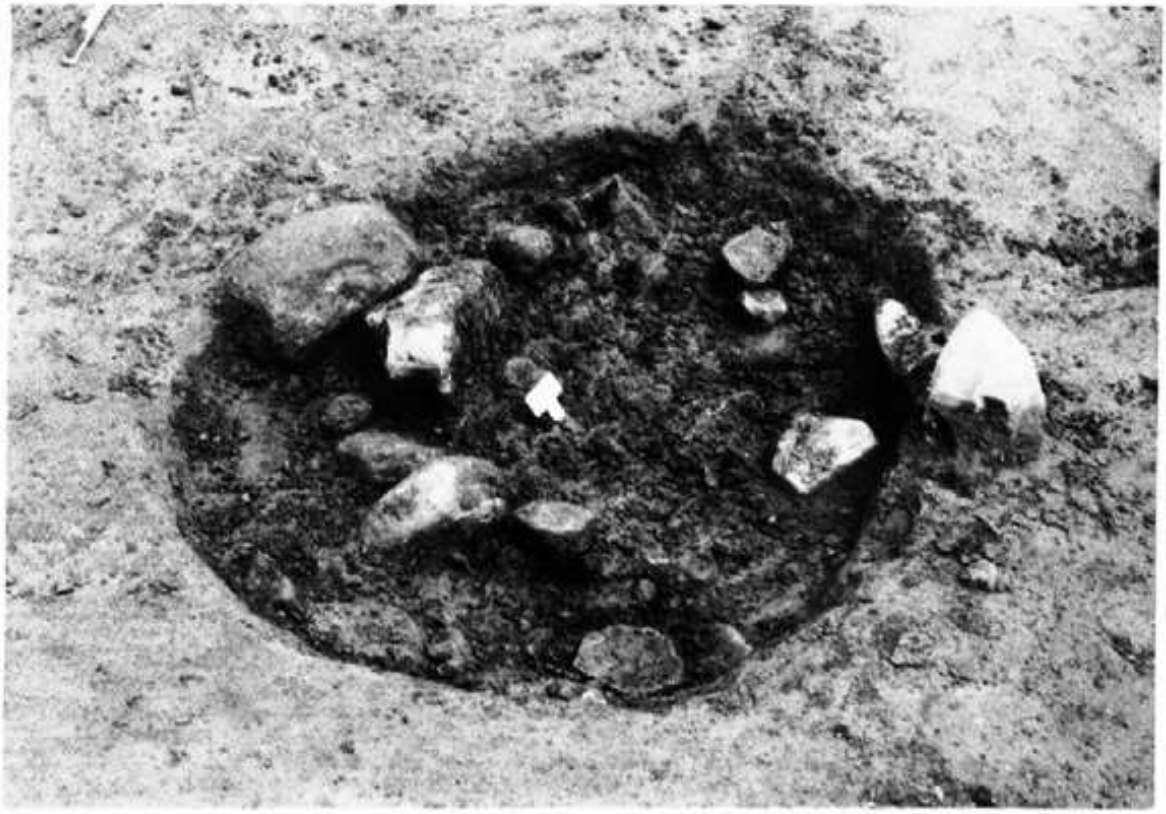
(2)L－4号炉跡



(1)D－6号土壙

(2)D－7号土壙

(1)D－8号土壙

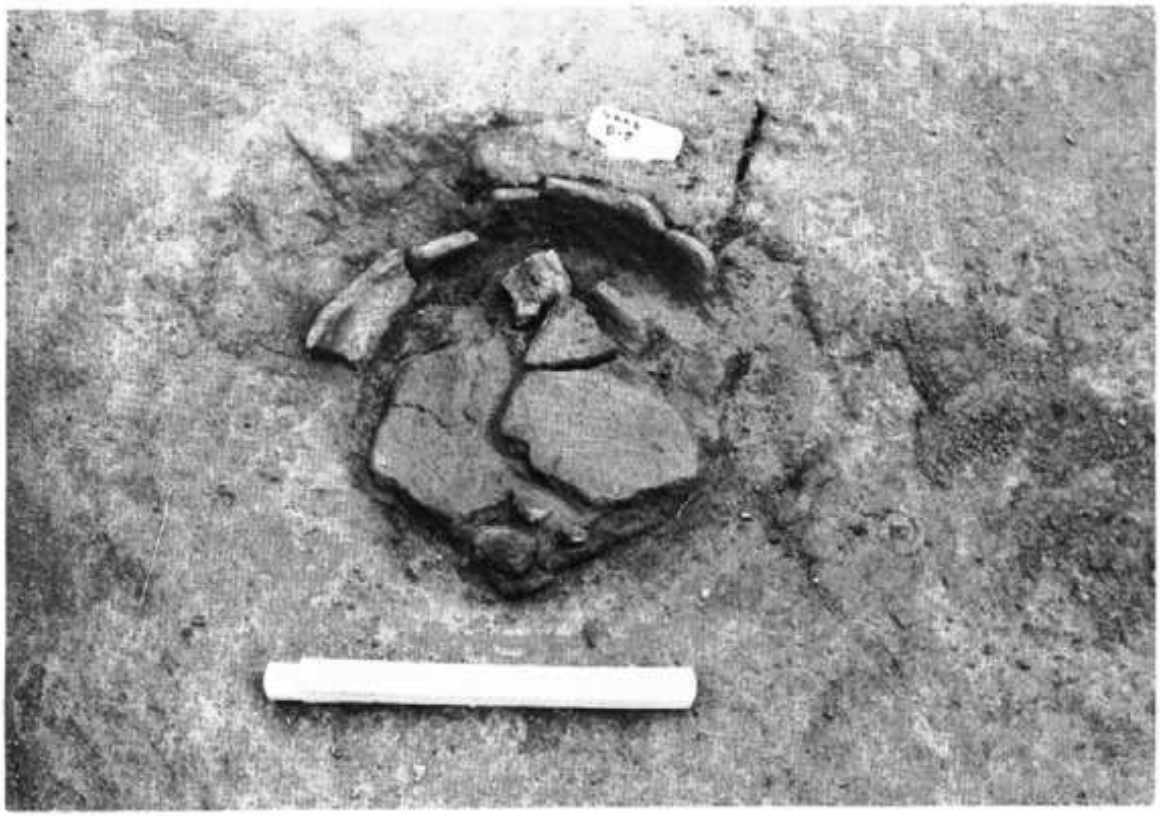


(2)同　　上

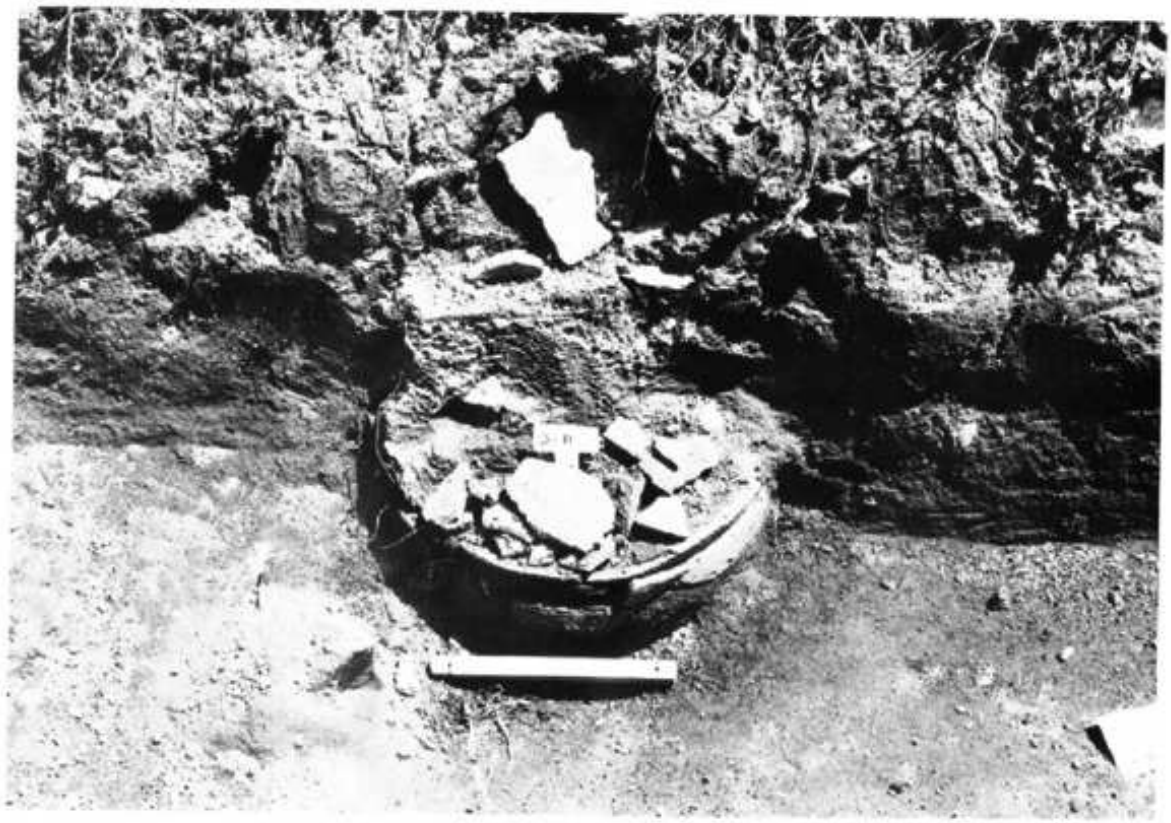
(1)D－12号土壙内土器出土状態

(2)同　　上

(1)土器出土状態



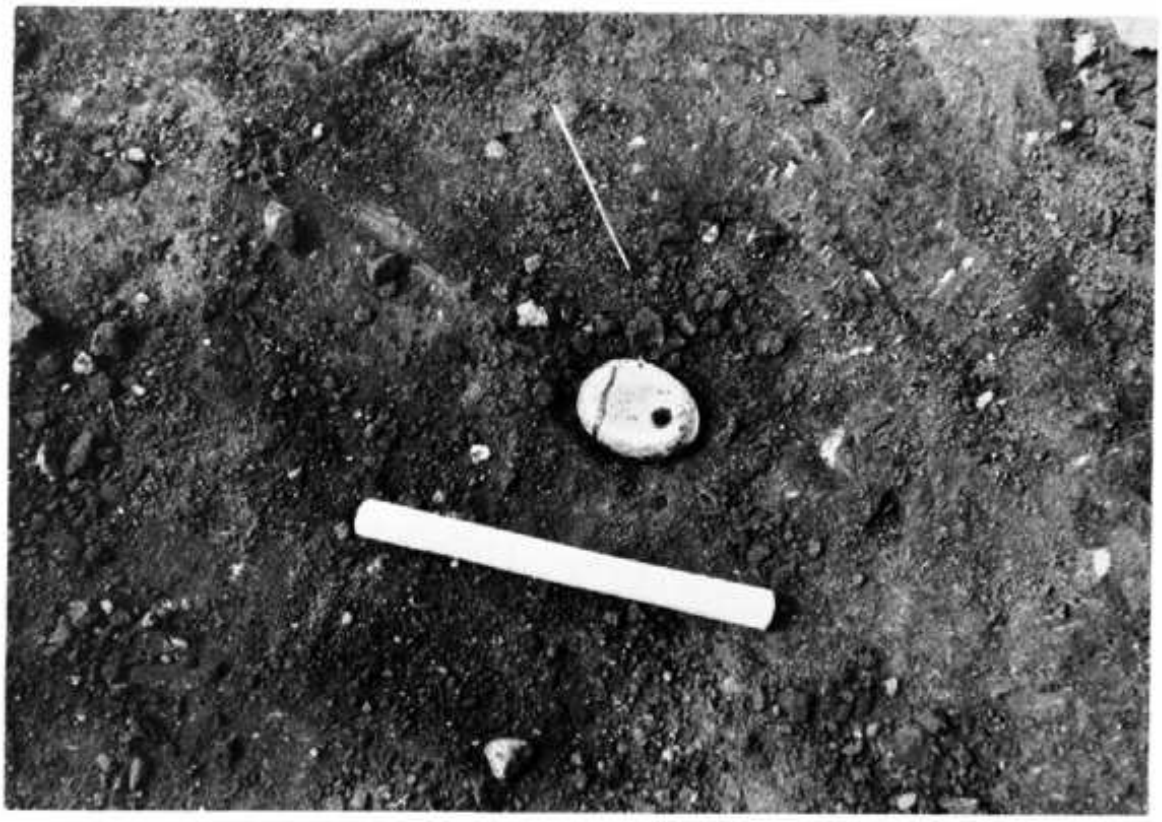
(2)同　　上



(1)土器出土状態

(2)同　　上

(1)土偶出土状態



(2)有孔石製品出土状態

(1)L－3号炉上出土の石皿

(2)石棒出土状態

E地点出土土器片

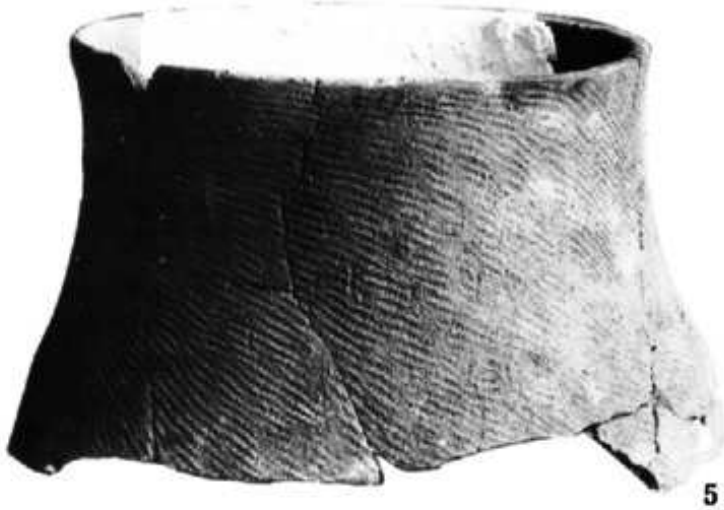
1

2

3

調査区出土土器 I

4



5

6

調査区出土土器II

7

9

8

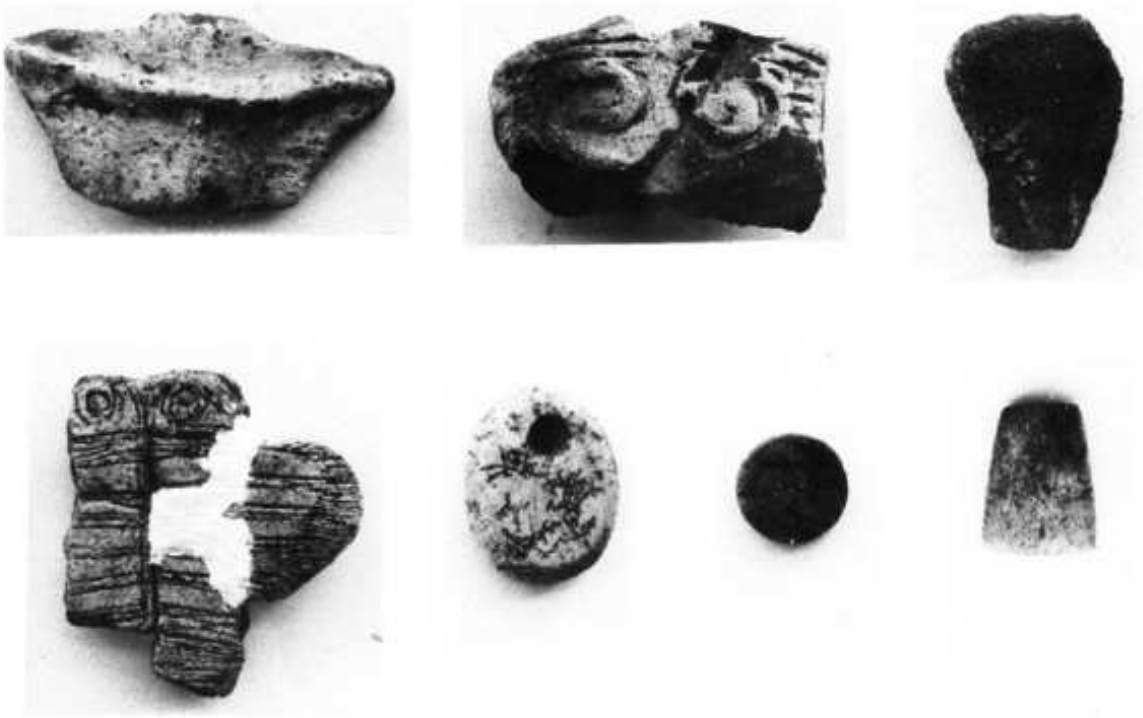
10

調査区出土土器III

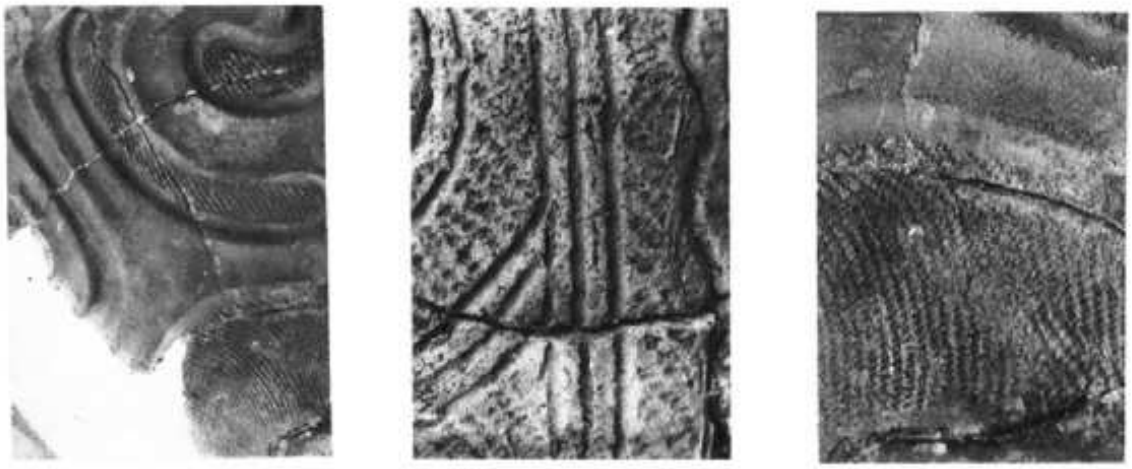
調査区出土石器類

(1) 石皿

(2) 凹石



(1)土偶・石製品



(2)土器細部写真

山形市熊ノ前遺跡
第3次発掘調査報告書

昭和53年11月

発行　山形市教育委員会
編集　熊ノ前遺跡発掘調査団
印刷　株式会社　大風印刷